SRID NEWSLETTER

No.300 OCTOBER ,NOVEMBER 2000

国際開発研究者協会　創設者大来佐武郎

〒102 -0074　東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館５階　FASID 内

ＳＲＩＤニュースレター300 号を記念して

代表幹事　神田道男

ニュースレターが 11 月で３００号になる。第１号が発行されたのが、１９７４年１２月、100 号が 1983 年 3 月、200 号は 1991 年７月である。1974 年というと私の勤めるＪＩＣＡが設立された年である。浅沼会長から各号の節目で、君が何をしていたか書いてみてはどうかと言われ筆をとっている次第である。まず、各号に何が書いてあるか簡単に紹介しよう。第１号は、設立総会における大来佐武郎会長の挨拶の要約である。先生は何と言っているか。「昨年の石油ショック以来、国際的スケールで解決しなければならい問題が山積し、それら問題の解決にあたって、急速な経済発展を遂げてきた日本の果たす役割がますます増大しているように思われます。――中略――こういう組織ができて相互扶助ということで海外で活躍する人をお手伝いし、また、最新の情報を入手しやすくなれば非常によいのではなか、国際的スケールの活動にとって有益なことでしょう」先生は、当時の状況と会の設立の目的をこのように述べておられます。

１００号はどうであろうか。北村美都穂代表幹事が「ＳＲＩＤ　この不思議な団体」と題して会員の一層の参加を呼びかけている。同じ号で大嶋清治さんがマレーシアのマハティール首相が筑波学園都市を訪問した記事を書いている。この時、既にマハティール氏が首相であったことに驚くとともに、電総研での説明の中心が、ジョセフソン電圧標準の研究、レーザーによるガン診断の研究、コンピューターによる画像処理の研究、ロボットの研究等で、首相は、ガンの検診に関心を示し、ロボットにはあまり関心を示さなかったとある。最近は、サイバージャヤ等ハイテクに熱を入れているマ首相であるがこの当時は、まだそれほどではなかったという事であろうか。ＩＴの表現はまだない。この頃、私は、JICA の企画にいて、中曽根総理の提唱した「アセアン青年招聘事業」や「アセアン科学技術協力」の実施に向けて仕事をしていたと思う。また、鈴木総理の時に始まった「アセアン人造り協力」について、成果をあげるべくあれこれ考えていたように思い出す。アセアン人造りは当時の加盟国、インドネシア、タイ、マレーシア、フィリッピン、シンガポールの５ヶ国にひとつづつ人造りセンターをつくり、これと沖縄のセンターを合わせアセアンの様々な分野での人材育成を図ろうとするものであった。各センターはそれぞれ目的を果たし今も活躍しているが、全体としてのネットワークづくりはできなかった。科学技術協力は、研究者の交流とこれを通じた共同研究を目指したが、交流の予算が技術協力として認められず、結局従来からのチーム派遣とプロジェクト方式技術協力による公設機関の技術の移転にとどまり大学や民間機関の参加は実現しなかった。青年招聘は当初７５０人から開始され、その後アジアの他の国々やアフリカ、南太平洋の諸国に拡大し、今では年間１６００人の規模になっている。当初目的とした２１世紀に向けた青年の交流が２１世紀を迎える今日どのような効果を果たしたかを評価する時期に来ているかもしれない。

２００号はアンケート形式で「私にとってのSRIDとは何か」「SRIDに何を期待するか」の結果が発表されている。昨年のシンポジューム「SRIDの再生を考える」を思い出させる内容である。多くの人がサロンとして自由な発想と情報の交換を行う場として位置付けていることがわかる。また、同号には第１回SRIDランチョンスピーチとしてOECF西垣総裁の講演内容が載っている。日本の援助量の増加、アンタイド化の進捗状況を述べるとともにOECFとしては内貨融資対策、世銀との協調融資、東欧への対応が課題であると述べている。その頃私は、JICAの付属機関である国際協力総合研修所で、開発援助の調査研究体制の整備や専門家を含む援助人材の育成に関係していた。漸く地域別国別のアプローチの重要性が認識され、国別援助研究や分野別の援助研究が軌道に乗りつつあった時期である。今話題となっている貧困問題や教育への取り組みをどのようにするか、研究会や検討会が行われていた。調査研究と比べて実際の協力の動きはやはり時間がかかるものだと実感される。

さて、３００号は２００号から９年経っている。この間、創設者の大来先生や宍戸先生も亡くなられ、他方ＯＤＡは、この間ずっと世界１位の実績を残している。
思えば、ＳＲＩＤ設立の頃は環境問題もまだ議論されておらず、資源開発を中心とした開発論が主流であった。１９７４年の春インドネシア石油化学工業開発のマスタープラン調査で(団長は三上さんで、北村さんもいたように思う)、田中総理の訪イに伴うジャカルタ暴動に遭遇し、スマトラのパレンバンでプルタミナのゲストハウスに２日間避難したことがあった。この頃は、鉱工業部に所属して、もっぱら、水力発電や資源開発の調査に取り組んでいた。それから２６年、現在の ODA を考えると貧困問題への対応（パイあるいは、健康、教育等の格差の是正）か、経済成長(パイを大きくする中での問題解決)、かの軸、実施にあたって「旗をおろした調和のある援助」か「顔の見える援助」かの軸をめぐって世銀やＤＡＣで激論？されている状況にある。わが国では、ＯＤＡは、有力な外交手段として、アジアの経済危機への対応、移行経済の国々への対応（東ティモールも含む）等、開発というより世界経済の安定、平和構築の手段と考えられるようになって来ているように思われる。２１世紀に向けて８月のシンポジュームで討論した IT は、沖縄サミットで、沖縄憲章として取りまとめられ、途上国との格差是正に向けての新たな援助が期待されている。こうしたテーマについて、SRID でも大いに議論をしていきたいと思う。３００号を迎えて過去の節目の出来事を思い出してみた。皆様の３００号は如何ですか。

リレー討論

ディジタル・ディバイド考

新生銀行経済顧問　　木内　嶢

先日、アジア各国から１０数人の経済学者が集い、ＩＴの意義を考えるフォーラムに顔を出してみた。ディジタル・ディバイドをどう捉えているのか、耳を澄まして聴いてみたが、やや混乱した印象が残った。

それでもいくつか、はっきりしたことがある。第１は、多くの国で、ＩＴを新たな飛躍の機会と見做し、新たな国家目標が定まったと奮い立っていることだ。為替金融危機後の発展のシナリオが見えてきたという思いもあるのだろう。特に、シンガポール、台湾あたりは、日本に先んじて米国を軸とするグローバルなＩＴネットワークへの参画しつつある、という自負さえ漂っていた。

それに引き換え、ベトナム他アセアン新規加盟諸国には悲観が目立った。工業化でさえ難題なのに、情報化まで進めなくては他国経済に追いつけないのなら、ますます先進国の背中が遠のいて見える、というわけだ。ＰＣも高価だし、情報インフラより先に整備すべ

きインフラがまだ山のようにあるのに、と言う。

第２は、ＩＴが諸刃の刃ではないか、とうすうす感じているらしいことだ。ＩＴで、情報の発信が容易くなるが、他方で流入する情報に弄ばれかねない。政府の情報統制に風穴が開いて民主化が進む、と期待する一方で、民族や階層間の相克が激化し、国の求心力が失われ、発展が滞ることを恐れている。

また米国の独善に抗してアジアの主張を世界に発信しうる、欧米の進歩派勢力と連帯すれば国際秩序を書きかえられると意気込む傍ら、知識の大衆化と頭脳流出が重なり合えば、知識階級が自ら瓦解しかねないと一抹の不安を抱いているやに見受けられる。

第３は、ＩＴが社会に根を下ろしていない分、観念論がまだかなり目立つことだ。米国内の論議を借りて夢を語るに雄弁なわりに、政策面で自国では何が次の一手かの具体的な話しができない。インノベーションを強調しても、現実の努力の延長上に生まれる発想と捉えるより、無から有を生じる玉手箱のように語り過ぎる。

第４は、教育が従来以上に国の発展における鍵を握りつつあるという認識が強いことだ。丸暗記式の受験戦争に片寄る教育からは、ＩＴ時代を担えそうな創造的な人材の輩出が期待しがたいと、どこの国の学者も口を揃える。学生にとり飛躍の糸口が、ますます自国の大学から欧米大学に移りつつあり、自国の大学の存在意義が問われていると言う。議論の当否はさておき、日本で行なわれる議論と余りにも似ていてびっくりする。

そんな議論を聞きながら、自問自答しているうちに、ヘンテコな感想が浮かんだ。ＩＴが多国籍大企業にとり、途上国低賃金利用の強力な新兵器だと考えれば、最貧国の低賃金が未利用で放置されることは考えにくい。底辺の賃金水準は上がる、と考える方が素直ではないのか。その意味で、ＩＴは低所得途上国に不利に働くばかりではあるまい。

おそらく試練に立たされるのは、わが国を含めて、むしろエスタブリッシュメントなのではあるまいか。親方日の丸主義が、海外と連係しＩＴ武装した新興勢力に突き崩されて行く。政府、大学、伝統的大企業などその国の既成勢力を守ってきた制度の壁が打ち破られる。

ちなみに、ＩＴの発展の決め手は、密度の高いネットワークを築き集積の利益を追求し、その中で、官産学協調の実を挙げることのようだ。何となく、シンガポール、香港、台湾といった都市国家に近い方が、意識の切り替えに一歩先んじている。大国は得てして動きが鈍い。

ディジタル・ディバイドというと直ぐ情報強者と情報弱者の格差が一層拡大することの問題と考えがちだ。そうした面を否定する積りはない。しかし、課題は格差の拡大を未然に防ぐことよりも、エスタブリッシュメントの新陳代謝を進め、ＩＴが齎す下克上を是とする覚悟なのではあるまいか。フォーラムで感じられたある種のアンビバランスは、それを予感した身震いのようにも思われた。

字幕スーパーよもやま話

羽馬　友子

本日は女性特集ということで、在阪の為、貴重なセミナーに参加できない私に声をかけて頂いたことに関して、まず、SRID の事務局の方々にお礼を申し上げたい。開発問題に関しては、数多くの見識ある方々からの寄稿があることと思うので、ここでは全く関係のない話をつづってみたいと思う。

先日、友人に誘われて甲南大学まで、戸田奈津子さんの講演を聞きに行った。戸田さんといえば、F.コッポラ監督の”地獄の黙示録”、近年では大ヒットした”タイタニック”の字幕スーパーの翻訳を手掛け、またハリウッドの Big　Name の映画スターのインタビューワーとしてよく TV にも出演されているためご存知の方も多いと思う。ただ私は、最

近あまり映画に行っていなかったし、戸田さんの個人的印象としては、”翻訳者とは言え、結構ミーハーなところが見受けられ、自分を映画業界人として勘違いしている輩の１人ではないか（戸田さん、本当に失礼！！）”と思っていた。ところが、実際の戸田さんは本当に、”業界風を吹かさない、実にイキの良い普通の人”であり、その証拠に会場に溢れんばかりの人だかりに、”私の講演にこんなに来場者が来て下さって、”と感激の言葉を漏らされていた。（御自分の職業は、映画スターのように決してスポットライトが当たるものと思われていない証拠であろう。）時間は決して長くはなかったが、初めて知る”字幕スーパー翻訳者としての職場、体験、よもやま話しを興味深く聞くことが出来た。

紙面の関係上、今日は特に印象に残ったお話を述べていく。まず、世界広しと言えども外国映画に字幕スーパーを入れて上映する国は、日本と、自国版吹き替え等の費用が捻出できない幾つかの開発途上国のみであって、日本人が不自由であっても字幕による上映を好むという点で日本のケースは特殊であると言うことだ。主演スターが来日したときに、日本の字幕事情を聞くと皆一様に喜ぶという。私の周りの人に聞いた所、”字幕支持派”が多かった。何を言うこの私も、”洋画を見るなら字幕”派である。もちろん、日本の声優の方々の演技力・よく台詞を識別し易い声の鍛え方には敬意を表するし、各 TV 局の計らい（？）で、スターのイメージと一致するような声質の方の台詞を聞くことが出来る。しかし一方で、演じる・台詞を発するということは、その演技が必然的に発生する為の状況―実際、環境・セット等―を伴ってワン・シーン、ワン・シーンごとに、正にその疑似”現場”で、役者が自身の肉体を持って作り出す―大袈裟に言えばその肉体の細胞１つ１つから、役者が絞り出した―魂と肉体全身から発したもの（台詞）である。それ故に、文化も背景をも異なった外国映画であっても、”同じ人間”として共感・感動を呼ぶのではないのだろうか。その意味では、妙にどの場面でも聞き取り易い台詞や、均一的・一定な音質の TV 吹き替え版洋画には、少なからず違和感を感じることがあった。また例え肉声とアンバランスであっても、それらをひっくるめたすべてが、役者の”個性”であり、現代が”個性”で時代であることを考えれば、私としては役者のイメージと声質とのギャップなどは余り問題にならないと思う。私の個人的な意見は別にしても、“字幕による映画鑑賞”が日本人に好まれるのは、日本人の文化的な要因によるらしい。興味深い話である。

また戸田さんは、職業として”字幕スーパーの翻訳者”としてのご苦労に付いて述べられていた。戸田さんが、いわゆる字幕スーパーの翻訳者として、世間一般に認められたのは、前述の”地獄の黙示録”での仕事が評価されてからで、それまでは OL をしながら、苦節〇〇年、辛抱強く、その仕事に従事するチャンスを伺っておられたらしい。正に”映画に魅せられた人生”である。また、字幕翻訳独特の苦労として字数制限があり、（ご存知の通り、人間がワン・カットごとに知覚出来る文字数というのは限られている、）文化・言語背景の異なる洋画を翻訳する為には、大胆な意訳も仕方ないとのことであった。一例として、ある男性に対して二人の女性が恋の鞘当てをしている最中の台詞―”I love him more than she does."この台詞を、戸田さんは”私が勝つわ。”と恋の勝利予告的に訳されたそうである。また、職業としての待遇面について、世間一般で、想像されて（？）いるのとは反対に、字幕スーパーの翻訳者は、一様に薄給で働いているそうで、生活の為にもインタビューの仕事も積極的に入れているとのことであった。その理由は、戸田さん曰く、”日本で配給・制作会社現地日本法人と映画製作親会社との関係は、―植民地とその宗主国この関係―だそうで、どれ程、ある映画が日本でヒットしようとも、そこで上がった収益は殆どが、親会社に吸い取られてしまうそうである。よって、給料のことを日本社の担当に行ってもどうしようもない。そのような理由で、生活の為に、月２－３本のペースで翻訳をせざるを得ないそうである。結果的に、洋画の年間配給数の現在、日本でその種の専業翻訳家が 7－8 人とのこと。思いもよらない実情であった。

その他にも、あの”タイタニック”の翻訳は台本到着の遅れて事実上、3 日で仕上げられたこと。字幕スーパー独特の、細い（はるさめのような）文字は、一字一字ガラスペン

で仕上げられているとのこと。ハリウッドでも”Big　Name”である、例えばトム・クルーズは一作の不評が俳優生命を左右し兼ねないリスクを冒してでも、次々に新しい作品ににチャレンジするスピリットを持っており尊敬に値することなど、全く新しく、面白い映画業界の知識を得ることができ、有意義な時間を過ごすことが出来た。考えてみれは、米国の様に（商業的価値についてはさて置いても、）映画を国宝にしてしまう程に”映画”に価値を認めている国（民）があることを考えれば、怠惰な私であっても、今後の人生において素晴らしいものを映画から得ることが出来るかも知れない。おかげで、最近めっきり疎遠になっていた映画についても、新たな視点から鑑賞する術を得た気がしている。

国際協力フェスティバル

学生部代表　　佐伯　風土
東京外国語大学　東南アジア課程カンボジア語科 2 年

10 月 7 日、8 日に国際協力フェスティバルが日比谷公園で行われ、学生部は今年ブースを出展して宣伝活動を行った。その結果、ブースを約 300 人が訪れて、広く SRID を知ってもらう良い機会となった。最近の勉強会にもこの時訪れた人達が大勢来てくれて大変賑やかになっている。

また、過去に本会の方々に協力して頂いた学生部主催の国際協力講座をまとめて自費出版した『国際協力！国際開発！16 人の物語』は 5 冊の売上。学生が企画したという特長が目を引いたのか。現在、幹事会でこの本の改訂版の構想が挙がっているが、本会と学生部の連携を強めることにも意味を持つのでぜひ検討したい。

ところで今回は学生部として幾つか新しいことをやってみた。その一つが CAPSEA（東南アジア文化支援プロジェクト）との協力によるフェアトレード販売だ。以前、スタディツアーで訪れたこの NGO はカンボジアで教育支援や女性自立支援を行っている。ここのセンターの障害者や女性が作ったカンボジアの伝統織りによる小物を学生部ブースで販売、その売上を全額送金するというものだ。そのことを品定めする人々にアピールした結果、28､400 円の売上を記録した。小さな国際協力だが先方も大変喜んでくれた。

もう一つは特設ステージで行われた学生ボランティア団体によるトークセッションに参加したことだ。「誰にでもできるボランティア」をキーワードに、若者としてボランティア活動を行う意義や団体として活動する意味などを討論した。学生同士の討論ということで興味を持った学生など多くの人々が耳を傾けてくれた。また、この企画を通して団体同士の横の繋がりが重要であるという認識をお互いに持った。SRID 学生部だけとしてではなく、他団体と協力することで自分たちだけではできないような大きくて効率的な企画ができる。その例が 6 月に行ったマイクロファイナンスについてのイベントだった。このような合同企画をこれからも行い、団体間の連携はもちろん、それ以上に学生個人としての人間関係というネットワークを結べるまでになっていけたらと思う。

総合的に今回は私達にとって非常に有意義なイベントであった。これからも SRID 学生部が、国際協力を模索中の学生が知識をつけたり、同じ興味を持った他の学生を知ることで刺激を受ける場になってほしいと私は思う。

（学生部 HP　http://www.musesworld.co.jp/web2/srid/srid.html）

国際開発研究者のためのジョーク集 その１エコノミスト・ジョーク

地域開発公団　小林　一

相手が発展途上国の方であれ、先進国の方であれ、いいコミュニケーションを図るのには「SENSE OF HUMOR」ということが大変大切です。そのための第一はジョークということになるでしょう。小生の異文化コミュニケーションの経験はさほどではないのですが、「SENSE OF　HUMOR」のある方々に恵まれていたため、お陰様で結構面白いジョークを蓄積することができました。中には小生（と仲間）の創作になるものもありますが、皆様のお仕事や、ご交遊のお役に少しでも立てればと思い、ご披露させていただくことにしました。ご好評でしたら、不定期のシリーズものコラムの形でしばらく続けていこうと考えております。
皆様にも様々のもちネタがおありかと思いますので、この場でご披露していただくといいのですがいかがでしょう。もちろんご感想、ご批判等も歓迎です。もっとよい表現があればご教示もお願いします。ジョークという性格上、特定の職業や人種等についての辛辣な表現が入ることがままあります。実際に使う場合には、TPO を十分にわきまえないととんでもないことになるので注意が必要です。今回は身内のニューズレターということでまずはストレートにご紹介してみますが、倫理規定上（？）問題があるようでしたら、その点もご指摘ください。いわゆる SEXY JOKE も、面白いものがいくつかあるのですが、品位を考え控えさせていただきます。
第一回はエコノミスト・ジョークです。東京アメリカンセンターで行われた経済問題についてのパネルディスカッションのなかで文化人類学者が使ったものです。

Doctor, Architect and Economist argued who is ranked highest in front of　God.
First, Doctor said　"We made Eve from Adam."
Then Architect "We made order of the universe from Chaos."
Finally, Economist mentioned " Do you know who made Chaos"

人類学者らしく、創世記（Genesis）由来のものですね。このジョークをオーストラリア人の親友に話したところ、次のようなジョークを返されました。

A company recruited economist with only one wing.
Then an economist with two wings applied, but he was rejected.
He claimed "I have two wings, more than one.Why should I be rejected ?"
Officer replied　"That's the reason why we don't employ you"

時節柄、エコノミストの方々も大変です。